第 13 回　「買物は世界とつながっている」

日時：9 月 14 日（水）　午後 7 時～午後 8 時 30 分
会場：龍谷大学　大阪梅田キャンパス　研修室
講師：高津　玉枝
所属：株式会社福市（LOVE&SENSE）　代表取締役
LOVE&SENSE ウェブサイト　http://www.love-sense.jp/
高津玉枝の最新フェアトレード情報　http://ameblo.jp/tamaefukuichi/

高津玉枝さんは、民間企業の営業職を経て、1991 年にマーケティング会社を設立し、大型商業施設のアドバイザー、商品企画、新規事業の立案や販売戦略を手掛けてきました。その際、多くの商業施設が価格の安い商品を大量に販売する状況に違和感を持ち、「フェアトレード」という理念を用いて流通業界に新しい価値観を提供できるのではないかと考え、2006 年にフェアトレード商品を扱う株式会社福市（LOVE&SENSE）を興します。一つの商品には、世界中の多種多様な文化や伝統だけではなく、経済格差、貧困、搾取といった困難を乗り越えるための知恵や工夫など、様々な物語が背景にあります。フェアトレードを通して、製作に関わった人たちに思いを馳せ、新しい買物への価値観を購買者に提案することを目指しています。

講座概要

講座では、フェアトレードの形態と途上国への企業の進出との違い、輸入コストをあえてかけてフェアトレードを行う意味、そしてフェアトレードラベルの課題について、御自身が事業を立ち上げる際に抱えていた疑問を提示した上で、高津さん自身が考える「フェアトレード」の概念や意義についてご説明いただきました。実際に訪ねた途上国での人々の暮らしや貧困の背景、フェアトレードに関わる人たち、株式会社福市の取り組みなどを通して、私たちが漠然と持っていたフェアトレードに対する知識を深め、国際協力・社会貢献の一つのあり方を示唆するものでした。

フェアトレードって何?　フェアトレードへの疑問

フェアトレードが必要とされるのは、途上国内の要因と国際的な要因があげられます。前者については、仲買人による生産者への不当な扱い、劣悪な労働環境、行政の腐敗といった要因であり、後者については、一時産品の不安定な価格、国際商品協定の崩壊、新自由貿易主義、そして援助の限界や失敗とされています*。高津さんは、こうした背景を理解しながらも、フェアトレードに対する疑問も同時に抱きます。例えば、フェアトレードという概念を用いなくても、途上国に産業を興すことで解決できるのではないか、輸入コストをかけて遠隔地で販売する意味があるのだろうか、そして、フェアトレードラベルを付けることにお金と労力が求められる場合、弱者を救済するという本来の趣旨と異なるのではないかといった点です。そうした疑問を解決するため、即座に行動に移します。実際にインドのフェアトレード団体を訪問し、日本では想像できない現地の苛酷な貧困の現状を視察しました。そして、施しではなく正当な労働の対価として商品を販売したいという生産者の強い思いや、人間としての尊厳を持っていることを強く感じます。ネパールでは、地政学的に非常に不利な場所にあるため、効率を優先する現在の貿易システムから完全に疎外された場所であることを目の当たりにし、そうした地域の生産者に新たな枠組を設定する必要を実感しました。さらに、ヨーロッパのフェアトレード認証団体を訪ね、認定ラベルやマークが、購買者にフェアトレードを周知して弱者が被っている問題へ関心を向ける有効な手段として、課題があっても必要なシステムと考えるようになります。

*　渡辺龍也『フェアトレード学 - 私たちが創る新経済秩序』（新評論）、参照。

参考：フェアトレードラベル

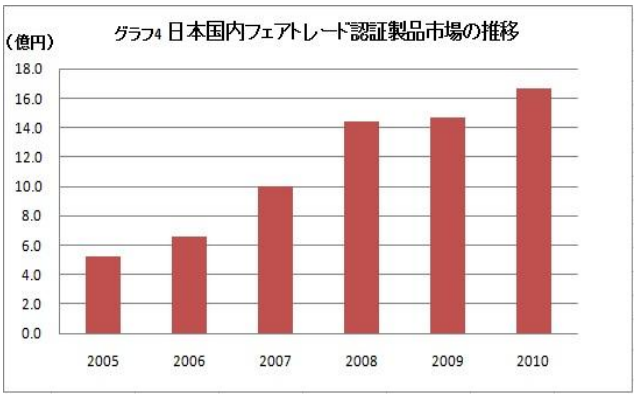
・国際フェアトレードラベル機構 （FLO: Fairtrade Labeling Organization International）発行による各団体共通のフェアトレード認定ラベル。FLO の基準に従って生産する商品がフェアトレード商品であることを認証し、同基準に従って購入・販売した商品に認証ラベルを貼付して販売することを許可する認証団体。

・フェアトレード団体を認定するマークとして世界フェアトレード機関（WFTO: World Fair Trade Organization）が認定するマーク。これは WFTO がフェアトレード団体と認めた団体に使用が許可され、日本を含む世界数十カ国のフェアトレード組織や生産者が加盟している。

目指すフェアトレード事業と国内のフェアトレード事情

高津さんが目指すフェアトレード事業は、大きく以下の二つに集約できます。フェアトレードを通じて、商品を買うという行為に関心を持ってもらい、商品の背景を伝えることによって貧困問題の解決の糸口を作ること、そして、途上国の人々自らが、販売市場にアクセスできる力を培うことです。

そこで、フェアトレード事業に専念するため、2006 年にフェアトレードに特化した株式会社福市を興します。当時のフェアトレード市場をみますと、認知度はわずか 3 パーセントにすぎず、主に現地で活動する NGO 関係者のみが関心を寄せているといった状況でした。また、多くの商品については、東南アジアの土産物的な扱いにしかすぎません。こうした状況を打開するために、フェアトレードを周知し、購入できる環境を整えること、またフェアトレード商品の質を向上させ、一つの新しい価値観として提示することを目的として事業に取り掛かります。そのために、福市では、市場調査の実施をはじめ、マス・メディアや企業にも積極的に商品のアピールを行いました。また、集客力の高い百貨店の担当者や各種流通業界にも働きかけ、イベントスペースにおける商品の販売も継続して行っています。成功した例もありますが、失敗した例もあり、事業として決して平たんな道のりであったとはいえません。ここ数年、国内フェアトレード認証製品の市場は拡大しており、現在では、ようやく多く店舗でフェアトレード商品を見受けられるようになりました。



出典：フェアトレードラベルジャパン ウェブサイトより(http://www.fairtrade-jp.org/whats_new/000175.html)

フェアトレードをビジネスとして成立させること

高津さんは、継続的な支援を行うには、フェアトレードを事業として成立させる必要があると考えています。フェアトレードの認証製品市場の拡大を背景に、関心が高まっていることも事実ですが、安定した商品の供給を始め、事業継続に向けて多くの課題が山積しています。今後、オリジナルブランドの開発や世界各国のフェアトレード企業と提携を進めながら、デザインを含め高い質の商品を提供し、日常の生活の中でフェアトレード商品が活用できるような展開が求められます。こうしたことが、事業として成功する重要な鍵になるといえます。

最後に、フェアトレードだけで世界が抱える様々な貧困が解決するわけではないと前置きされながらも、貧困の問題は途上国だけの問題ではなく、先進諸国に住む私たちとも深く関わっている点、そして、フェアトレードについて関心を持ってもらうことが、そうした問題を知る第一歩になることを述べられました。フェアトレードのシステムは改善する余地があり、未完成であることも事実ですが、フェアトレードを通じて世界の問題を考えることの大切さや、フェアトレード事業を軌道に乗せ安定的な供給を実施することの重要性については、受講者にとっても同じ思いであるといえるでしょう。

―被災地支援 EAST LOOP プロジェクト―

福市では、東日本大震災の被災地支援の一環として、EAST　LOOP プロジェクトを始動しました。これは、自分のペースで参加できる手仕事を被災地に提供し、少しでも元気になってほしいという思いからスタートしており、現在は、陸前高田市、釜石市、大槌町へと広がっています。

EAST LOOP：http://www.east-loop.jp/　　＊FaceBook ではより詳細な情報を発信しています(http://www.facebook.com/EASTLOOP)